

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500722

研究課題名(和文)オリンピック競技会の文化・芸術性に関する研究

研究課題名(英文)Study on the cultural and artistic factors of the Olympic Games

研究代表者

真田 久(SANADA, Hisashi)

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：30154123

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：古代オリンピックで実施されていた吹奏競技と布告競技は芸術競技の範疇に入るものであり、その伝統を受け継いで、今日のオリンピックは文化プログラムを行うことがオリンピック憲章にて決められた。バルセロナ大会(1992)より、前大会終了後から4年間に及ぶ文化プログラムが行われ、カルチュラルオリンピアドと名付けられて今日まで継続されている。オリンピアドとは、大会開催年の1月から4年間を指すので、大会終了後も文化プログラムを続け、オリンピックレガシーとするべきである。日本から発信すべき文化プログラムとして、嘉納治五郎の理念、日本の和の心を伝えていくことは、文化交流や国際交流に貢献すると期待される。

研究成果の概要(英文)：The trumpeter and herald competitions in the ancient Olympic Games were included in the artistic competition. The Olympic Charter says that the Olympic host city must hold a culture program as well as sport competitions. The cultural program has begun since 1992 Barcelona Olympics, and its program was called Cultural Olympiade because it started from the end of the fore Games. The new Olympiade begins at January 1st when the Olympic Games will be celebrated in that summer. Then we should continue the cultural program after the Olympic Games as one of the Olympic legacy of culture and art. We should appeal the ideal of professor Jigoro Kano, contents of physical education in schools and the spirit of Japanese culture for the cultural exchange and international communication for the future Olympic Games.

研究分野：スポーツ人類学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：オリンピック 文化プログラム カルチュラル・オリンピアド 古代オリンピック ギリシャ 嘉納治五郎

## 1. 研究開始当初の背景

オリンピック競技会における文化プログラムは、近代オリンピックの創設者、ピエール・ド・クーベルタン(1863~1937年)も早くから注目し、芸術競技として、1912年の第5回大会から行われた。これは戦後においては芸術展示となり、今日では文化プログラム(カルチュラル・オリンピアド)として行われている。

この芸術競技や文化プログラムについての国外における研究には、近代オリンピックの歴史研究の中で、しばしば取り上げられてきた。例えば、Richard Stanton(2001)や、Juergen Wagner(2008)によるものがある。国内では舩本直文や太田圭などにより取り上げられている。

これらの研究は、クーベルタン以降の芸術・文化プログラムの研究であるが、近代オリンピックが古代オリンピックの復興という側面をもって始められた以上、古代における芸術競技や芸術的な要素はどのようにして行われていたのか、ということも明らかにされる必要がある。

また、近代オリンピックに一定の影響を与えたことが近年明らかになった、イギリスのマッチウェンロックオリンピック競技会においても、芸術的、文化的プログラムが行われていたことから、古代オリンピックを意識した祭典は、時代や地域を超えて、文化・芸術的プログラムが必須のものと認識されていたといえる。

## 2. 研究の目的

### (1)古代オリンピックにおける文化・芸術性

紀元前776年から行われていた古代オリンピックは、宗教的な祭典であったことから、さまざまな宗教的な儀式が行われていた。その際には、神々を喜ばすために音楽の演奏や彫刻等の作品が奉納された。芸術家はこぞってオリンピアに集まり、裸でスポーツに励む若者たちを作品の対象にした。神殿も当時の

一級の建築家が作成するなど、芸術・文化との関連は強かったが、古代オリンピックでは、芸術競技は行われていなかったとされている。一方、他のデルポイやネメア、イストミアなどの全ギリシャ的競技祭では芸術競技が行われていたことがわかっている。年代的にも、あるいはその名声からしても、オリンピックを範として、他の3つの祭典は行われていたことから、この点は明らかに矛盾がある。しかしながら、この点に言及した先行研究は皆無である。そこで、まず古代オリンピックにおける芸術競技が本当に存在していなかったのかどうかを検討する。そして競技ではなくても、それに近い要素や人類学でいうところの残滓がないかを突き止め、古代オリンピックにおける芸術的・文化的要素について明らかにする。

### (2)近代のオリンピックにおける文化・芸術性

近代オリンピックが始められる以前のヨーロッパでは、各地でオリンピック競技会の復興が模索された。例えばイギリスのマッチウェンロックでは、ウェンロックオリンピックが1850年からほぼ毎年開催された。またギリシャのアテネでも、1859年、1870年、1875年、1888・1889年にオリンピック競技祭が開催されている。アテネでのオリンピア競技祭は、後にクーベルタンにより始められた近代オリンピックに一定の影響を与えていることから、これらの芸術競技や文化プログラムを明らかにし、その理念や規則、出展者などから、それらの文化・芸術的要素を明らかにする。

### (3)現代のオリンピック・パラリンピックにおける文化・芸術性

ロンドン大会(2012年)と第5回ネメア競技祭(2012年)、ソチ冬季大会(2014年)における文化プログラムの内容や理念を検

討し、それらを古代との接点、精神性、教育性、地域性などの文化要素から考察する。

### 3. 研究の方法

古代や前近代のオリンピックについては古代人の書き残した文献やそれらに関する先行研究により当時の競技会の文化・芸術性について考察する。現代のオリンピック競技会における文化・芸術性（文化要素）については、2012年のロンドン大会と2014年のソチ冬季大会におけるカルチュラル・オリンピックについてフィールドワークを行い、その文化・芸術性について明らかにする。そしてその結果に基づき、今後あるべき文化・芸術プログラムの構造を提示する。

### 4. 研究成果

#### (1) 古代オリンピックにおける文化・芸術性

古代ギリシャにおいては、オリンピアとともに、ネメア、デルフィ、イストミアでのいわゆる四大競技祭で行われた芸術競技とは次の内容であった。音楽競技（笛などの楽器演奏）と詩歌競技（朗読）が主な競技で、誰の音色が遠くまで鮮明に聞こえるかを競い、賞品として野生の葉冠が運動競技と同様に与えられた。

オリンピア競技祭の期間中におこなわれる吹奏競技（ラッパ吹奏者による競技）と布告競技（勝利者の名前を呼び上げる人を決める声の競技）は、音楽競技や詩歌競技の変容した競技と見ることができる。古代オリンピックに関する古代の詩人（紀元前5世紀のピンドロス、バッキュリデス）や哲学者（紀元前5,4世紀のソクラテスやプラトン）そして歴史家（ヘロドトス、ツキディデス）、紀行家（2世紀のパウサニアス）などの文献や近年の研究書や論文から、古代オリンピックの文化・芸術性（神との関係、社会への貢献、道徳性）等が抽出された。

ギリシャで行われた第5回ネメア競技祭については、競技場の選手入場門が復元され、それを披露する大会でもあった。選手入場門（トンネル）は、現実から神域へと変容する重要なツールであることが理解された。

#### (2) 前近代オリンピックにおける芸術・文化性

近代オリンピックにおいては、クーベルタンより1912年の第5回オリンピック競技会より芸術競技が始められ、その理念は古代に習い、身体と精神の調和をはかるというものであった。1912年以前の1896年の第1回近代オリンピックや1906年のアテネでの中間オリンピックでも、音楽の演奏やベネチア祭、遺跡への訪問や講演会などの文化プログラムが行われ、近代オリンピック初期から文化・芸術性を有していた。

さらに1859年、1870年、1875年、1888・89年に開催されたギリシャ独自のオリンピア競技祭においては、産業製品展示会の中に芸術的要素をもつものが展示され、さらにそれらの中から、芸術作品の展示と競技が生まれていき、後にクーベルタンが発想したものと同様の、絵画、彫刻、建築、音楽、文学の五種の芸術競技が行われていたが、これも古代とのつながりを徐々に強めていったためであった。

以上から、古代、前近代、近代オリンピックにおける文化・芸術性の文化要素とは、古代との接点、神性、平和、コミュニケーション、内面的啓発、教育性、地域性などであったといえる。

#### (3) 現代におけるオリンピックの文化プログラム

2012年のロンドンオリンピック・パラリンピックの文化プログラムの内容について調査した結果、スポーツ組織の関係者のみではなく、法律関係者や芸術家、そして平和団

体など多方面の関係者が関与していることが理解された。特にロンドン市内にある高等裁判所において、スポーツと法 (Sport and Laws) というテーマで行われていたが、法律家がスポーツの運営を法学的にとらえるなどユニークな視点を発見できた。

パラリンピック関連では、パラリンピック競技の起源とされているストーク・マンデビル病院におけるグットマン博士と障がい者のためのスポーツの展示について調査した。それによれば、スポーツが脊髄損傷者の機能回復に大きな効果を果たしたことがわかりやすく展示されていた。同時に今日のパラリンピック競技のプレイ中の激しさは、当初の趣旨から逸脱している面もあることが確認され、今後のパラリンピック競技のあり方を考えさせる内容でもあった。これらの文化プログラムは、今後のオリンピック・ムーブメントを考えさせる内容が含まれており、原点に立ち返る機会を持ちながら、文化プログラムを構成して行くことの重要性が示唆された。

ソチ冬季大会では、2010年から2014年まで、10万人を超えるアーティストにより、3000以上の多様な文化イベントがロシア連邦文化省の後援のもと提供され、300万人以上の人々が鑑賞したイベントであった。4年間の年を次のように特徴づけた。2010年：映画の年、2011年：劇場の年、2012年：音楽の年、2013年：ミュージアムの年。

各年のテーマに沿って多様なプログラムが展開されたが、「愛国心の歌のフェスティバル」など愛国的な内容のイベントも多く含まれていた点は、オリンピックの文化プログラムとしていかがなものか、という疑問符がつけられる。

これらの過去の例から2020年の東京大会ではどのようなカルチュラル・オリンピックが展開されるべきなのか、考えることも重要である。嘉納治五郎の理念 (精力善用・自

他共栄、一世化育) 平和、協調、融和、なごみ、おもてなしなど、日本文化や精神性を示す和の文化を基調として、海外の様々な文化と融和し、平和な社会を築いていこうとするメッセージ性をもったカルチュラル・オリンピックを創造していくべきであると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

真田久、4年周期のオリンピック、季刊民族学、査読無、146巻、2013、pp.54-55

真田久、東京オリンピック・パラリンピックを学校体育で扱うために、体育科教育、査読無、61巻、2013、pp.35-38

竹村瑞穂、真田久、大林太朗、日本におけるオリンピック教育研究の現状と今後、台湾身体文化學報、査読有、14巻、2012、pp.1-13

〔学会発表〕(計8件)

真田久、オリンピック・ムーブメントにおけるパラリンピックの位置づけ、日本パラリンピアンズ協会10周年記念シンポジウム、2013年9月29日、味の素ナショナルトレーニングセンター(東京都北区)

真田久、嘉納治五郎の人的ネットワーク、日本体育学会第64回大会、2013年8月28日、立命館大学(滋賀県草津市)

真田久、オリンピズムと教育、文部科学省、JSC、筑波大学、嘉納治五郎記念国際スポーツ研究交流センター主催国際シンポジウム：オリンピズムの進化と深化、2013年7月13日、国連大学(東京都渋谷区)

Hisashi SANADA, The Legacy of prof. Jigoro Kano, The 1<sup>st</sup> International Indo Japanese Conclave, 2012年12月22日, Manav Rachna International University (Haryana, India)

Hisashi SANADA, Disciples of Jigoro Kano, International Congress by Italian Association of Sport Education, 2012年10月20日, University of Piemonte Orientale (Vercelli, Italy)

Akiyo Miyazaki, Toshiyuki Okeya,

Hisashi SANADA, The New Olympic Education initiative in Japan, The first International Colloquium of Olympic Studies and Research Centre, 2012年7月25日, Loughborough University (Loughborough, Great Britain)

〔図書〕(計4件)

真田 久, 他、道和書院、体育・スポーツ史にみる戦前と戦後、2013、2-22

真田 久, 明和出版、19世紀のオリンピック競技祭。2011、244

〔その他〕

ホームページ等

<http://core.taiiku.tsukuba.ac.jp>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

真田 久 (SANADA, Hisashi)

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：30154123